発掘調査の概要

石神遺跡の調査（飛鳥藤原第140次）

「飛鳥は怖い。」

予想もしない遺構や遺物が現れる。そんな調査を何度も経験した研究所の先輩に言われた言葉です。

現地説明会も終わり、いよいよ調査も終盤、と幅の広い南北溝を掘り下げていくと、溝底で杭が頭を出していることに気づきました。

杭は、上から打ち込まれるため、その年代決定が難しいので、調査員泣かせの遺構です。今回の杭列も、先端を尖らせており、当時の地表から打ち込まれたものと考えられます。杭の周囲を掘り下げたところ、溝底より少し下で東西方向に一列に並ぶことがわかりました。どうやらこの杭は溝が掘られた段階で削られたようです。溝は天武朝～持統朝の時期の木簡をはじめとする遺物を含んでおり、この杭列は７世紀後半以前に打設されたものと考えることが出来ます。

この杭列を追っていくと、調査区の西辺で北にほぼ直角に曲がっていくことがわかりました。東側を探すと、今度は杭とあわせて東向きに面をもつ南北の石組がみつかりました。この結果、杭列はコの字状に打設されていることが明らかになったのです。

杭は土留めや柵、石組は溝や池の一部の可能性があり、今回の調査区の東・北方の調査が待たれます。これまでの調査では知られていない遺構であり、その性格や時期の検討が必要です。

杭も石組も、もう数㎝掘り下げなかったら気づかなかったかもしれません。飛鳥は怖い、という言葉を強く感じた調査でした。

（埋蔵文化財センター　金田 明大）

石組と杭列（南東から）

藤原宮朝堂院東第四堂の調査（飛鳥藤原第142次）

都城発掘調査部では、藤原宮中枢部の構造を明らかにするための計画調査を進めています。儀式や政務の空間である朝堂院には東西にそれぞれ６棟ずつの建物（朝堂）が左右対称に整然と並び、これまでに東側４棟の発掘調査を終えました。今回の調査対象は東第四堂という南北棟建物です。建物の中心と推定される位置には用水路が東西に通っているので、まず水路を挟んだ南半分を調査しています。調査面積は760㎡です。調査は４月４日から開始し、７月以降は北半部の調査に移る予定です。

朝堂院は戦前から戦中にかけて日本古文化研究所が発掘調査をおこなっています。しかし、礎石の位置を確かめる部分的な調査だったので、建物の詳しい構造までは明らかにされていません。近年おこなった４棟の調査でも、それぞれ日本古文化研究所の調査成果と異なる新知見が得られています。

さて、肝心な東第四堂の残りはあまり良くありません。建物の基壇の高まりも残らないほど、後世に削平されています。それでも、建物の範囲内では地ならしの土の中に拳大の石を多く含み、特に石が密集する場所に礎石が置かれていたと推定できます。建物の解体に使用した足場穴も見つかりました。いっぽう、建物の外側には瓦が散乱し、建物の範囲もほぼ明らかにできそうです。現状を写真や図面に記録したのちに、排水溝など建物を造営する際の痕跡を見つけるべく、調査は続きます。

今年の春は雨が多く、調査区内に溜まった雨水の排水作業に追われています。これから梅雨を迎えるので、担当者も天気予報の当たりはずれに一喜一憂する日々が続きそうです。

（都城発掘調査部　豊島 直博）

遺構精査直前の状態（北から）